

참고문헌

특집 | 메이지유신에 ‘동아시아 근대(성)’를 묻는다: 메이지유신 150주년 특집

메이지 일본 경제발전의 ‘복층성’(複層性): ‘근대’ 대(對) ‘재래’의 이원론을 넘어서 |

다니모토 마사유키

ウェーバー, マックス, 『支配の諸類型』(世良晃志郎訳), 創文社(原著1956年刊行), 1970.

石川一三夫, 『近代日本の名望家と自治: 名誉職制度の法社会史的研究』, 木鐸社, 1987.

奥村弘, 「近代日本形成期の地域構造: 地域社会の変容と地方制度改革をめぐる」, 『日本史研究』 295号, 1987.

金澤史男, 『自治と分権の歴史的文脈』, 青木書店, 2010.

久留島浩, 「百姓と村の変質」, 『岩波講座・日本通史 15巻 近世5』, 岩波書店, 1995.

坂根嘉弘, 『日本伝統社会と経済発展』, 農文協, 2011.

沢井実・谷本雅之, 『日本経済史: 近世から現代まで』, 有斐閣, 2016.

竹内洋, 『立身出世主義: 近代日本のロマンと欲望』, 日本放送出版協会, 1997.

谷本雅之, 『日本における在来的経済発展と織物業: 市場形成と家族経済』, 名古屋大学出版会, 1998.

谷本雅之, 「日本における“地域工業化”と投資活動: 企業勃興期: 地方資産家の行動をめぐる」, 『社会経済史学』第64巻第1号, 1998.

鶴巻孝雄, 『近代化と伝統的民衆世界: 転換期の民衆運動とその思想』, 東京大学出版会, 1992.

ハンター, ジャネット, 阿部武司・谷本雅之監訳, 『日本の工業化と女性労働: 戦前期の繊維産業』, 有斐閣(原著は2003年刊行), 2008.

土方苑子, 『近代日本の学校と地域社会: 村の子供はどう生きたか』, 東京大学出版会, 1994.

渡辺尚志, 『近世村落の特質と展開』, 校倉書房, 1998.

Tanimoto, Masayuki, “From Peasant Economy to Urban Agglomeration: The Transformation of ‘Labour-intensive Industrialization’ in Modern Japan”(Austin, Gareth and Kaoru Sugihara eds., *Labour-intensive Industrialization in Global History*, Routledge, 2013).

포스트-소라이학(徂徠学)의 맥락으로 읽는 도쿠가와 후기 사상사의 논점: 메이지 유학자들의 사상적 토대 | 이새봄

박훈, 『메이지유신은 어떻게 가능했는가』, 민음사, 2014.

와타나베 히로시, 『일본정치사상사 [17~19세기]』, 고려대학교출판문화원, 2017.

河野有理, 『明六雑誌の政治思想: 阪谷素と「道理」の挑戦』, 東京大学出版会, 2011.

河野有理, 『田口卯吉の夢』, 慶応義塾大学出版会, 2013.

坂本多加雄, 『市場・道徳・秩序』, ちくま学芸文庫, 2007.

島田英明, 『歴史と永遠—江戸後期の思想水脈』, 岩波書店, 2018.

高山大毅, 『近世日本の「礼楽」と「修辞」: 萩生徂徠以後の「接人」の制度構想』, 東京大学出版会, 2016.

前田勉, 『江戸の読書会: 会読の思想史』, 平凡社, 2012.

真壁仁, 『徳川後期の学問と政治: 昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』, 名古屋大学出版会, 2007.

松田宏一郎, 『江戸の知識から明治の政治へ』, ぺりかん社, 2008.

三谷博, 『維新史再考: 公議・王政から集権・脱身分化へ』, NHK Books, 2017.

渡辺浩, 『東アジアの王権と思想』, 東京大学出版会, 1997.

Paramore, Kiri, *Japanese Confucianism: A Cultural History*, Cambridge University Press, 2016.

Pocock, J.G.A., *Virtue, Commerce and History*, Cambridge University Press, 1985.

국학의 메이지 유신: 복고의 착종으로부터 신도를 창출하기까지 | 배관문

고야스 노부쿠니, 이승연 옮김, 『귀신론』, 역사비평사, 2006.

무라오카 츠네즈구, 박규태 옮김, 『일본 신도사』, 예문서원, 1998.

박규태, 『일본 신사의 역사와 신앙』, 역락, 2017.

야스마루 요시오, 이원범 옮김, 『천황제 국가의 성립과 신흥종교』, 소화, 2002.

이노우에 노부타가 외, 박규태 옮김, 『신도, 일본 태생의 종교시스템』, 제이앤씨, 2010.

今井宇三郎 他 校注, 『水戸學』, 日本思想大系 53, 岩波書店, 1973.

大野晋·大久保正 校訂, 『本居宣長全集』 1·8, 筑摩書房, 1968~1993.

島崎藤村, 『島崎藤村全集』 8~9, 筑摩書房, 1981.

芳賀登·松本三之介 校注, 『國學運動の思想』, 日本思想大系 51, 岩波書店, 1971.

東より子, 『國學の曼陀羅: 宣長前後の神典解釋』, ぺりかん社, 2016.

安丸良夫·宮地正人 校注, 『宗教と國家』, 日本近代思想大系 5, 岩波書店, 1988.

吉岡徳明, 『古事記傳略』, 國民精神文化研究所, 1938(1883~1886).

국가라는 신체에서 전통과 근대는 어떻게 만나는가: 가이에다 노부요시의 인체 그림을 중심으로 | 김태진

김영민, 「근대성과 한국학: 한국 사상사를 중심으로」, 『오늘의 동양사상』, 13호, 2009.

김태진, 「근대 일본의 통치라는 신체성: 메이지 헌법의 구성과 바디폴리틱(Body Politic)」, 『한국동양 정치사상사연구』 제16권 1호, 2017.

박훈, 「‘연속하면서 혁신’-막말정치사와 메이지유신을 보는 시각」, 『일본역사연구』 40호, 2014.

이희만, 「존 솔즈베리의 국가유기체론-제도화를 중심으로」, 『서양사론』 제106호, 2010.

嘉戸一将, 「身体としての国家-明治憲法体制と国家有機体説」, 『相愛大学人文科学研究所研究年報』 4, 2010.

渡辺昌道, 「海江田信義の洋行-シュタイン・クルメッキとの交流を中心に」, 『千葉史学』 50, 千葉歴史学会, 2007.

東郷尚武, 『海江田信義の幕末維新』, 文藝春秋, 1999.

滝井一博, 『ドイツ国家学と明治国制: シュタイン国家学の軌跡』, ミネルヴァ書房, 1999.

瀧井一博 編, 『シュタイン国家学ノート』, 信山社出版, 2005.

水田洋, 『知の風景-続・近代 ヨーロッパ思想史の周辺』, 筑摩書房, 1994.

市村由喜子, 「ローレンツ・フォン・シュタイン日本関係文書について」, 山住正己 編, 『文化と教育をつなぐ』, 国土社, 1994.

海江田信義, 「須多因氏講義筆記」, 明治文化研究会 編, 『明治文化全集』4巻 憲政篇, 日本評論社, 1992.

Henderson, John B., *The Development and Decline of Chinese Cosmology*, Columbia University Press, 1984.

Lefort, Claude, “The Permanence of the Theologico-political?,” trans David Macey, *Democracy and Political Theory*, Cambridge: Polity Press, 1988.

Lloyd, Geoffrey and Sivin, Nathan, *The Way and the Word: Science and Medicine in Early China and Greece*, Yale University Press, 2002.

Shogimen, Takashi, “Treating the Body Politic: The Medical Metaphor of Political Rule in Late Medieval Europe and Tokugawa Japan”, *The Review of Politics*, Vol 70, Issue 1, 2008.

메이지미술과 일본의 ‘근대’: 메이지미술회를 중심으로 | 오윤정

기타자와 노리아키, 「美術」 개념의 형성과 리얼리즘의 転位: 메이지·다이쇼期の ‘미술’ 인식에 대하여, 『미술사논단』 2, 1995. 12.

김향미, 「일본 근대기 미술교육에 있어서의 보혁논쟁에 관한 연구: 오카쿠라 가쿠조와 고야마 쇼타로의 모필화·연필화 논쟁을 중심으로」, 『미술문화연구』 7, 2015. 12.

青木茂 編, 『明治洋画史料: 懷想篇』, 中央公論美術出版社, 1985.

青木茂 編, 『日本近代思想大系17 美術』, 岩波書店, 1989.

金子一夫, 『近代日本美術教育: 明治・大正時代』, 中央公論美術出版, 1999.

北澤憲昭, 『眼の神殿: 「美術」受容史ノート』, 美術出版社, 1989.

北澤憲昭, 『境界の美術史: 「美術」形成史ノート』, フリュッケ, 2000.

北澤憲昭, 佐藤道信, 森仁史 編, 『美術の日本近現代史: 制度・言説・造形』, 東京美術, 2014.

木下直之, 『美術という見世物』, 筑摩書房, 1999.

木下直之, 『戦争という見世物: 日清戦争祝捷大会潜入記』, ミネルヴァ書房, 2013.

佐藤道信, 『明治国家と近代美術: 美の政治学』, 吉川弘文館, 1999.

坂崎担 編, 『日本画談大観』, 目白書院, 1917.

高階絵里加, 『異界の海: 芳翠・清輝・天心における西洋』, 三好企画, 2000.

外山卯三郎, 『日本洋画史』 第2巻, 日貿出版社, 1978.

日本洋画商協同組合 編, 『日本洋画商史』, 美術出版社, 1985.

강박과 히스테리 사이, 메이지 유신과 동아시아의 근대성: 시마자키 도손, 루쉰, 염상섭 | 서영채

시마자키 도손, 노영희 옮김, 『과계』, 문학동네, 2010.

시마자키 도손, 노영희 옮김, 『집』, 민문고, 1990.

시마자키 도손, 송태욱 옮김, 『신생』, 문학과지성사, 2016.

루쉰, 노신문학회편 옮김, 『노신선집』 1, 여강, 2003.

염상섭, 『염상섭전집』, 민음사, 1994.

『藤村全集』, 筑摩書房, 1965.

『魯迅全集』, 人民文学出版社, 1973.

『漱石全集』, 岩波書店, 1996.

권호중 강명화, 「루쉰 소설이 고골의 「광인일기」로부터 받은 주제의식」, 『세계문학비교연구』 35, 여

- 름, 2011.
- 박삼현, 「천칭폐지령과 메이지 유신」, 『일본연구』 21집, 2014.
- 박훈, 『메이지 유신은 어떻게 가능했는가』, 민음사, 2014.
- 서영채, 「둘째 아들의 서사: 염상섭, 소세키, 루원」, 『민족문학사연구』 51, 2013.
- 나카무라 미쓰오, 고재석 김환기 옮김, 『메이지문학사』, 동국대학교출판부, 2001.
- 미야지마 히로시(宮嶋博史), 「‘화혼양재’와 ‘중체서용’ 재고: 일본 중국과 구미와의 만남」, 백영서 외, 『동아시아 근대이행의 세 갈래』, 창비, 2009.
- 브루스 핑크, 이성민 옮김, 『라캉의 주체』, 도서출판b, 2010.
- 스피노자, 추영현 옮김, 『에티카』, 동서문화사, 2013.
- 홉스, 진석용 옮김, 『리바이어던 1』, 나남, 2016.
- 新保邦寛, 『独歩と藤村: 明治三十年代文學のコスモロジー』, 有精堂, 1996.
- 平野謙, 「島崎藤村: 藝術と実生活」, 『島崎藤村』, 河出書房新社, 1978.
- Lacan, Jacques, *The Seminar XVII: The Other Side of Psychoanalysis*, translated by Russell Grigg, W.W.Norton & Company, 2007.

특별기고

국문학 논쟁을 통해서 본 조선 후기의 국가, 사회, 행위자 | 김영민

- 김명호, 「이언진과 『이상전』」, 『한국문화』 70, 규장각한국학연구원, 2015.
- 류준경, 「조선시대 소설유통의 ‘혁명성」, 『인문논총』 74(4), 2017.
- 무악고소설자료연구회, 『한국고소설관련자료집』 2, 태학사, 2001.
- 박희병, 『저항과 아만』, 돌베개, 2009.
- 박희병, 『나는 골목길 부처다: 이언진 평전』, 돌베개, 2010.
- 박희병, 「『호동거실』의 반체제성」, 『민족문학사연구』 63, 2017.
- 송호근, 『인민의 탄생: 공론장의 구조변동』, 민음사, 2011.
- 이윤석, 『조선시대 상업출판: 서민의 독서, 지식과 오락의 대중화』, 민속원, 2016.
- 정병설, 『조선시대 소설의 생산과 유통』, 서울대학교출판문화원, 2016.
- Certeau, Michel de, *The Practice of Everyday Life* 3rd edition, trans. Steven F. Rendall, University of California Press, 2011.

연구논단

세계사와 포월적 주체: 고야마 이와오의 역사철학과 근대비판 | 장인성

- 가라타니 고진, 조영일 옮김, 『세계사의 구조』, 도서출판b, 2012.
- 나카무라 미츠오, 니시타니 게이 지 외, 이경훈 외 옮김, 『태평양전쟁의 사상』, 이매진, 2007.
- 사카이 나오키, 후지이 다케시 옮김, 『번역과 주체』, 이산, 2005.
- 이예안, 「근대일본에서 천황-국가적 ‘주체’ 개념의 형성」, 『개념과 소통』 제20호, 한림대학교 한림과 학원, 2017.

장인성, 「냉전과 일본의 자유주의: 마루야마 마사오의 냉전자유주의와 리얼리즘」, 『동북아역사논총』 59호, 동북아역사재단, 2018.

허우성, 『근대일본의 두 얼굴: 니시다철학』, 문학과지성사, 2000.

高山岩男(花澤秀文編), 『超近代の哲学』, 燈影舎, 2002.

高山岩男, 『文化類型学』, 弘文堂, 1939.

高山岩男, 『世界史の哲学』, 岩波書店, 1942.

高山岩男, 『日本の課題と世界史』, 弘文堂, 1943.

高山岩男, 『日本民族の心: 文化類型学的考察』, 玉川大学出版部, 1972.

高山岩男, 『場所的論理と呼応の原理』, 弘文堂, 1951.

高山岩男, 『哲学的人間学』, 岩波書店, 1938.

高坂正顕, 『歴史的世界』, 岩波書店, 1937.

鈴木康史, 「明治期日本における「主体」の変容と「身体」のゆくえ」, 『近代教育フォーラム』 第18巻, 2009.

福田恆存, 「絶對者の役割」, 『福田恆存全集』 第4巻, 文藝春秋社, 1987.

森哲郎, 「解説」, 森哲郎編, 『世界史の理論』, 燈影舎, 2000.

森哲郎編, 『世界史の理論』, 燈影舎, 2000.

西田幾太郎, 『西田幾太郎全集』 第12巻, 岩波書店, 1949.

小林敏明, 『〈主体〉のゆくえ: 日本近代思想史への一視角』, 講談社, 2010.

長谷正當, 「解説」, 高坂正顕, 『歴史的世界』, 燈影舎, 2002.

前田角藏, 「主体性と他者: 終戦直後の文学論争と現在の〈日本〉」, 『日本文学』 44巻11号, 1995.

花澤秀文, 「解説」, 高山岩男, 『世界史の哲学: 戦後日本思想の原点』, こぶし書房, 2001.

Goto-Johnes, Christopher, "The Kyoto School and the History of Political Philosophy," Christopher Goto-Jones ed, *Re-Politicising the Kyoto School as Philosophy*, Routledge, 2008.

‘전쟁민’(戰災民)에서 ‘피폭자’(被爆者)로: 일본 원폭피폭자원호의 제도화와 새로운 자격의 범주로서 ‘피폭자’의 의미 구성 | 오은정

권혁태, 「히로시마/나가사키의 기억과 ‘유일피폭국’의 언설」, 『일본비평』 제1호, 2009, 60~89쪽.

박경섭, 「조선인원폭피해자와 초국적 시민(권)」, 『현대사회과학연구』 제13권, 2009, 153~166쪽.

被爆者援護法令研究会, 『原爆被爆者関係法令通知集』, 2003.

根本雅也, 『広島の戦後三〇年間にみる原爆被害の表象と実践』, 一橋大学社会学研究課修士論文, 2006.

竹峰誠一郎, 「被爆者」という言葉がもつ政治性」, 『立命平和研究』 9号, 2008.

広島県原爆被爆者団体協議會, 『核兵器のない明日願をって: 広島被団協の歩み』, 2001.

笹本征男, 『米軍占領下の原爆調査: 原爆被害国になった日本』, 新幹社, 1995.

広島市, 『原爆被爆者対策事業概要』, 広島市, 2001.

中島竜美, 「朝鮮人被爆’の歴史的意味と日本の戦後責任」, 『在韓被爆者を考える』, 在韓被爆者問題市民会議編, 凱風社, 1988.

Lindee, Susan, *Suffering made Real: American Science and the Survivors at Hiroshima*, Chicago & London: The University of Chicago Press, 1994.

Todeschini, Maya, "Illegitimate sufferers: A-bomb victims, medical science, and the government",

Daedalus, Vol. 128, no.2, 1999, pp.67~100.

Yoneyama, Lisa, *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*, University of California Press, 1999.

수목괴수 고질라의 탄생과 특촬 테크놀로지: 제국과 포스트제국의 단속적 선율 | 이경희

강태웅, 「국가, 전쟁 그리고 '일본영화': 진주만 공습 1주년 기념영화를 중심으로」, 『일본역사연구』, 2007. 6.

이경희, 「특촬물로 본 '일본'과 '세계'의 후지산」, 『일본학보』, 2013. 8.

岩崎昶, 『(日本近現代史)映画史』, 東洋經濟新報社, 1961.

瓜生忠夫, 『日本の映画』, 岩波新書, 1956.

加藤典洋, 『さようなら, ゴジラたち: 戦後から遠く離れて』, 岩波書店, 2010.

「企画だけの面白さ『ゴジラ』(東宝)」, 『朝日新聞』, 1954. 11. 3.

「『ゴジラ』より数段勝る『原始怪獣現わる 米・J・ディーツ, H・チェスター・ブロ, 大映配給』」, 『読売新聞』, 1954. 12. 17.

竹内博・村田英樹(編), 『ゴジラ 1954』, 実業の日本社, 1999.

田中友幸, 「刊行によせて」, 『ゴジラ: 特撮映像の巨星』, 朝日ソノラマ, 田中友幸監・東宝株式会社協力, 1978. 5. 1.

「ちょっとスゴイ!? 放射能の怪獣『ゴジラ』(東宝)」, 『毎日新聞』, 1954. 11. 4.

鶴見俊輔, 「戦争批判の眼」, 『映画芸術』, 1957. 3.

「みものは特殊撮影だけ: 怪獣映画『ゴジラ』= 東宝」, 『読売新聞』, 1954. 11. 3.

[영화]

〈ゴジラ〉(1954)

〈太平洋の鷲〉(1953)

〈ハワイ・マレー沖海戦〉(1942)

The Beast from 20,000 Fathoms (1953)

아베정권 시기의 외교·안보에 대한 여론과 정책 | 경제희

경제희, 「일본 정치에서의 북한 쟁점-선거 및 내각지지율을 중심으로」, 『통일전략』 9(2), 2009, 157~179쪽.

경제희, 「일본 자민당의 집권은 보수적 유권자 결집의 결과인가: 2012년 중의원선거에서의 일본 유권자의 이데올로기와 정당 선택」, 『일본연구논총』 45, 2017, 91~122쪽.

김용복, 「일본 우경화, 한일관계 그리고 동아시아-과거사 갈등과 영토분쟁」, 『경제와 사회』 99, 2013, 36~62쪽.

이지원, 「일본의 '우경화': '수정주의적 역사인식'과 아베식 '전후체제 탈각의 한계」, 『경제와 사회』 101, 2014, 53~86쪽.

蒲島郁夫・竹中佳彦, 『現代日本人のイデオロギー』, 東京大学出版会, 1996.

蒲島郁夫・竹中佳彦, 『イデオロギー』, 東京大学出版会, 2012.

白崎護, 「有権者のイデオロギーにおよぼす政策争点の重要性と政治信頼の影響」, 『静岡大学法政研』 20(2), 2015, 39~67쪽.

- 澁谷壮紀・谷口尚子・Chris Whinkler, 「政党マニフェスト・コーディング・データを用いた有権者のイデオロギーに関する国際比較・時系列比較」, 『2015年度選挙学会発表論文』, 2015.
- 竹中佳彦, 「保守イデオロギーの影響力低下と年齢」, 『選挙研究』 30(2), 2014, 5~18号.
- 竹中佳彦・遠藤晶久・ウィリ・ジョウ, 「有権者の脱イデオロギーと安倍政治」, 『レヴァイアサン』 57, 2015, 25~46号.
- 谷口将紀, 「日本における左右対立(2003~2014年): 政治家・有権者調査を基に」, 『レヴァイアサン』 57, 2015, 9~24号.
- 中野晃一, 『右傾化する日本政治』, 岩波新書, 2015.
- 三宅一郎, 「『保守: 革新』自己イメージと態度空間」, 『同志社法学』 35(4), 1983, 1~58号.
- 白鳥令, 『日本における保守と革新』, 日本経済新聞社, 1973.
- Rosati, Jerel A, *The Politics of U. S. Foreign Policy*, Harcourt Brace, 1993.